

「初めての言葉」が語られる時  
—ある一人の障害の重い人との関わりをもとに考える—  
A Case Study of a Profoundly Retarded Person  
— When the first word is spoken —

遠 藤 司  
Tsukasa ENDO

目 次

はじめに

- I 対象者：ジュンくんについて
- II 「うきうき」という言葉を語ったジュンくんの姿の記述
- III 「言語」と「気分」について
- IV 考察：「裂開し現われてきた気分」と「共通した感覚的世界を基盤とした言語の始まり」という視点から「初めての言葉」を考える

はじめに

筆者は、障害の重い方々と関わりのある場面をともに積み重ねてきた中で、彼らが長い年月をかけて言葉への道を歩み続け、「初めての言葉」を語るに至る姿を見ることができた。彼らは、不自由な身体を懸命に動かして文字を書いたり、文字盤を指さして文字を選択したりして言葉を語っていた。筆者は、彼らが「初めての言葉」を語るたびに、関わり手としての大きな喜びを感じ、それほどまでにして彼らが言葉を語ろうとするものの意味を常に考えさせられてきた。

「初めての言葉」を語るために必要なものは何であるのか。筆者が障害の重い方々と関わりを続けながら、常に問われてきた問題である。記号、文字を学習し、それを表出するための能力を身につけることは必須である。しかしながら、それだけで説明することのできない彼らの姿を筆者は見えてきた。語りた言葉が彼らに生じ、かつ、それを受けとめることのできる場があって、初めて彼らの言葉は語られる。彼らの中に語りた言葉が生じるのは何ゆえであり、彼らの言葉を受けとめることのできる場とはいかなるものであるのかという問いは、障害の重い方々との関わり手であろうとする人間にとって、極めて重要なテーマであると筆者は考えてきた。

本論文では、一人の障害の重い方：ジュンくんが初めて自ら言葉を語った場面を取り上げる（注1）。「うきうき」という言葉が彼にとっての「初めての言

言葉」になり得たのはなぜか、彼は「初めての言葉」を語った時いかなる世界を生きていたのか、彼の「初めての言葉」を根本で支えていたものは何であったのか等の問題について考察を深めていきたい。

I 対象者：ジュンくんについて（注2）

ジュンくんは1993年生まれの男性である。筆者は、1995年7月に彼と出会い、以後、一ヶ月に一度、実際に関わりをもつようになった。

出会った当初の彼は、仰向けで寝たきりの状態にあり、自ら身体を動かすことは極めて少なく、また、日常生活は全面的な介助が必要であった。感覚面については、見ることにより様々な身体運動をおこしていると明らかに認められる様子を示し、周りの音をよく聞いている様子を示していた。身体運動については、自ら体を起こしたり寝返りをうったりすることはないが、手や足を動かすことはあり、さほどコントロールされた状態ではないものの、周りにあるものに手を出そうとしたり足で蹴ろうとしたりしていた。他者とのコミュニケーションについては、関わり当初から周りから言われることを彼なりに理解していると思えるような様子を示すことがあった。例えば、筆者が彼に、「〇〇をやってみようか」等の問いかけをすると、彼が「ハイ」と応えることもあった。また、彼に対して好意的に関わる人が彼に接すると、彼はうれしそうに笑い、その人との関わりを楽しむ様子も示していた。

関わり当初の彼の障害の状況や日常生活の様子について、以上に記したように筆者は見ている。これらのことをもとに、筆者は彼に対して適切と思われる課題を、すなわち、彼が自ら行おうという意志をもって取り組むことができ、かつ、できたことの結果を確認することができる課題を提示することにより、関わり場面を作り続けた。この過程の中で、原的な「空間」を構成し、「概念」の世界に入り、「言葉」を作ることを一つの課題として提示するに至り、ついには2009年4月、15歳7ヶ月の時に、初めて自分の気持ちをあらわす言葉：「うきうき」を自分で語った（ペンで紙に書いた）のである。その場面における彼の姿を以下に記述する。

## Ⅱ 「うきうき」という言葉を語ったジュンくんの姿の記述

2009年4月の関わり場面は、いつもよりも多くの人が入り、にぎやかな雰囲気に進んだ。ジュンくんは極めて機嫌が良く、笑顔も多く、少し興奮気味になることもあった。この雰囲気の中で、今日の感想を最後に訊くこととした。

筆者が彼に、「今日はどうでしたか、感想を聞かせて下さい、何でもいいよ」と言って、彼にペンを握らせて紙に向かわせた。しかし、これだけで彼が自ら何らかの言葉を作り書くことはなかった。そこで筆者は、選択肢の言葉をこちらから出して、その中から、今の自分の気持ちに近いものを選んで書くよう促すこととした。その場で見ている人たちから、「よい」、「やった」、「かず」、「うま」という四つの選択肢としての言葉が提示された。彼は、選択肢を出してくれた人と筆者が様々なやりとりをするのをじっと聞き、うれしそうに笑っていた。筆者はここで改めて、「今日の感想はどうでしたか」と彼に訊ねた。

彼はペンをもち、紙に向かい、しばらく考えている様子を示した後、おもむろに、まず、「う」の文字を書いた。四つの選択肢の言葉のうち、「う」で始まるのは「うま」だけなので、彼はこれを選んで書こうとしているのだと筆者は思い、「これは『う』だよ、ひょっとして今日の感想は『うま』かな」と言うと、彼はうれしそうに笑った。しかし、彼は、筆者の予想に反して、二つ目の文字として「う」の

右隣に「き」と書いた。あらかじめ出されていた四つの選択肢の中に、「うき」で始まる言葉はなかったので、筆者はこの時点で少なからず戸惑った。なぜならば、四つの選択肢の言葉以外のものを彼が書くことを想定しておらず、また、「うき」が何を意味しているのか、この後にどんな言葉が続くのか、想像することができていなかったからである。しかし、彼はこの後も文字を続けて書こうとしていたので、筆者は彼の次の動きを待った。

しばらくの後、彼は、「き」の右隣に「う」の文字を再度書いた。つまり、「うきう」と書いたのである。筆者はこの時点で、彼が何を書こうとしているのか想像することができた。そこで彼に、「もう一文字書くよ」と言いながら「う」の横にさらに文字を書くよう促すと、彼は、紙からはみ出す勢いで、「き」の文字を書いた。つまり彼は、「うきうき」という言葉を、自身の「初めての言葉」として語ったのである。彼のこの姿を見て、その場で見ている人たちは大いに喜び、彼に対する賛辞を述べ続けた。それを聞きながら、彼は心からうれしそうに笑いながら、喜びの表情を浮かべていた。それは、多くの人たちが自分を大いに讃えていることに対する喜びであると同時に、自分で考えて言葉を語ったことへの満足感もこめられているように筆者には見えた。

以上、ジュンくんが、「うきうき」という「初めての言葉」を語った場面を記してきた。この場面に関わり手として立ち会った筆者は、彼が、筆者と出会ってから13年9ヶ月の歳月をかけた後に、「初めての言葉」を語ったことに心から感動した。同時に、この時、彼の中で何が起こっていたのか、なぜこの言葉が「初めての言葉」として成立したのか等の問いをもった。そして、これらの問いについて考えを深めるためには、「言語の始まり」について考えることと、「うきうき」という一つの「気分」について考えることが必要であると思いついたのである。本論文では、「言語の始まり」に関するメルロー＝ポンティ（注3）の思索と、「気分」に関するハイデッガー（注4）の思索に依り、考察を始める。それをもとに、彼が「初めての言葉」を語った時に生きていた世界の解明に向けて、考察を深めていくこととしたい。

### Ⅲ 「言語」と「気分」について

#### (1) 「言語」について (注5)

メルロー＝ポンティは、著書『世界の散文』において、「人類の最初の言葉」について取り上げ、「言葉」が、人類にとって言葉のない世界を生きていた時には知ることのなかった、まさに「新しい世界」と呼ぶべきものをもたらしたと述べる。その上で、人類の最初の言葉は、「コミュニケーションの無」(メルロー＝ポンティ、1979a、64)の中で起こったのではなく、「それは、すでに多くの人に共通した行為から生れ、すでに私的世界であることを止めた感覚的世界に根を下していた」(同上、64)ことを、さらには、「人間が世界の中で他の人間を光景の一部として知覚するという事実によって、コミュニケーション以前にすでにコミュニケーションの原理が与えられていた」(同上、64)ことを強調して述べる。つまりメルロー＝ポンティは、「言葉のある世界」が全く新しい世界であることを記した上で、その世界を新たに生きる時には、多くの人に共通のものとなっている「感覚的世界」(原初的であるかもしれないが)を既に生きているのであり、さらに、「他者とのコミュニケーションの原理」(こちらも原初的であるかもしれないが)が与えられた世界を生きているということを明確に述べているのである。

さらにメルロー＝ポンティは、われわれが言語体系をもつために、成功した「言葉」を積み重ねることが重要であると述べる。

「完成された表現・・・われわれがそのように呼んでいるものは、成功したコミュニケーションなのである」(同上、48、下線強調は筆者による)

「言葉とは私がもっとも固有なものとして有しているもの、私の生産性ではあるが、にもかかわらずそれは、その生産性によって意味をつくり、それを伝達せんがための生産性でしかないのである」(同上、186、下線強調は筆者による)

メルロー＝ポンティは、言葉のもつ意味の中でも、「伝達」を、すなわち、相手に伝わることを重視している。だからこそ、語る言葉のうちでもコミュニケーションに成功したもののみが、すなわち、伝わることに成功したもののみが、語られた言葉として積み重ねられ、共通の基盤としての「制度化された言葉、つまり言語体系」(同上、186)が形成される

のである(注6)。

さらにメルロー＝ポンティは、言葉が通じ合うことについて、以下のように述べる。

「われわれは、いずれもが同じ文化的世界に属し、なによりもまず同じ言語体系に所属しているかぎり、たがいに侵蝕しあうものだ」(同上、184)

この記述の中で、メルロー＝ポンティは、自らの言葉が他者に伝達されることが成功し、同じ言語体系を持ち合えた時、互いに侵蝕しあう、すなわち、互いの領域をおかしあい、入り込みあうと記している。他の箇所でも以下のように述べる。

「私の他者への、また他者の私への蚕食」(同上、176)

「私は、その言葉が『私のうちに』あると言うことさえできないのだ。というのも、言葉は『聴き手のうち』にもあるからである」(同上、186)

「私が聴いているときにも、私は受動的ではなく、他者が語ることにならって・・・語っているのである。語るということは単なる私の発意ではないし、聴くということも他人の発意に服することではない」(同上、190)

「言葉がわれわれに関わり、われわれをはずかひから襲い、われわれを籠絡し、われわれを引きずりこみ、われわれを他者に変え、他者をわれわれに変える」(同上、192)

「言葉が私と私ならざるものとの境界を廃棄し、私にとって意味をもつものと私にとって無意味なもの、主体としての私と客体としての他者とのあいだの二者択一の関係性を消し去る」(同上、192)

メルロー＝ポンティは、これらの箇所で、ある意味執拗に、語り手が能動的で聴き手が受動的という一方的関係にあるという見方を排そうとしている。後期の思索の中で多用された「侵蝕」という概念がここで用いられていることに注目すべきであると筆者は考える。つまり、メルロー＝ポンティは、言葉を語り語られる時、能動と受動、主体と客体といった二分法を超えて、いずれもが能動であり受動であるような、主体であり客体であるような関係の中で言葉が通じ合うのだと述べ、そしてついには、私と他者という、主体と客体という二者択一の関係性を消し去ろうとまでしたのである。

こうしたことが可能となるには、私と他者との間に、侵蝕しあえるような関係を可能とする共通の基

盤が必要となる。これが、先述した、「言語体系」なのであるが、その前提となっているものが、言葉話す前に既に持ち得ていた「感覚的世界」だと考えられる。しかし、メルロー＝ポンティは、さらにも述べる。

「同じ一つの大地へのわれわれの根づき、同じ一つの自然についてのわれわれの経験こそが、われわれをその（コミュニケーションの）企てに投じる当のものだ」（同上、186、括弧内および下線強調は筆者による）

ここでいう「大地」とは、フッサールの1934年のテキスト、「自然の空間性の現象学的起源に関する基礎研究—コペルニクス説の転覆」（注7）によるものと考えられる。メルロー＝ポンティは、著書『言語と自然』の中で、このテキストに関して再三言及し、「大地」の意味について思索をしている。例えば、下記のように述べる。

「あらゆる経験の揺籃、土台、土壌」（メルロー＝ポンティ、1979b、169）

「原故郷」、「空間性の根」、「共通の祖国」、「原歴史」、「世界への原参入の本拠」（同上、172）

こうした表現で「大地」の意味を述べた上で、メルロー＝ポンティは、「それこそが存在以前の存在ないし原初の存在を基礎づける」（同上、172）と述べるのである。

メルロー＝ポンティの言語論に学ぶ時、われわれは、言語によるコミュニケーションを根源で支える共通の基盤にまで考えを及ぼすことができる。それがあるからこそ、われわれは言語を語り語られることができ、意思伝達やコミュニケーションを成功させることができる。「初めての言葉」を、つまりは「言語の始まり」を考察しようとしているわれわれにとって、共通の言語体系に至る前の、共通の基盤をいかに考えるかということは、極めて重要な問題である。ジュンくんが「初めての言葉」を語った時、彼とわれわれが共通の基盤としていた「感覚的世界」とはいかなるものであるのか、さらには、「感覚的世界」を基礎づける「大地」とはいかなるものであるのかという問いについては、原初の世界に遡りすぎているがゆえに、対象化し言語化することが極めて困難であると考えざるをえない。しかし、こうした問いを意識しつつ、「初めての言葉」を語った時に生きられた世界を解明しようとすることは、

極めて重要なことであると筆者は考える。

ここで改めて一つの視点を提示する。ジュンくんの「初めての言葉」は、「うきうき」であった。彼が「うきうき」という、その時の「気分」をあらわす言葉を「初めての言葉」として語ったことに注目したい。このことについて考えることが、コミュニケーションを根源で支える共通の基盤を考察することにつながり、かつ、そこから言語を語るという新たな経験を生じせしめる原理を明らかにする手がかりになると考えるからである。そのために、人間にとっての「気分」を思索したハイデッガーの論に、特に哲学の根本気分について論じた著書『形而上学の根本諸概念』に学びつつ考えてみたい。

## (2) 「気分」について

ハイデッガーは、「気分」とは人間の存在の根本様式であると述べる。

「気分はそれ自身、有（存在）の、それも、現一有の、一つの根本の有り方、一根本様式なのであり、現一有のということには常に相互共同有のということが直接的に含まれているのである」（ハイデッガー、1998、111 括弧内は筆者による）

「気分はポジティブには一つの根本的な有り方、如何に現有が現有として有るかのその根本様式である」（同上、111）

「気分は根源的な如何に、であり、この如何に、においてどの現有もそれが有る如くに有るのであるから、気分は最も不安定なものなどではなくて、現有に根底からして存立と可能性とを与えるものである」（同上、111）

「気分は思惟、行為よりもより根源的にわれわれの本質へと戻り届いており、気分においてわれわれは初めて一個の現一有としての一われわれ自身に出会うのだ」（同上、113）

ハイデッガーは、「気分」がわれわれ人間の存在のあり方を決めるのであり、それが根源にあるからこそ、存立と可能性とを与える述べる。つまり、気分が根源にない存在はあり得ないのであり、いかなる気分によっても、われわれが存在者として存在している以上、その根本に「気分」があり、存在を支えているのであり、だからこそ、根源にある「気分」に出会うことにより、本来的な自分自身に出会うことができるのだと述べるのである。

しかしながら、ハイデッガーは、こうも述べる。

「気分は現有の根底にまで戻り導くゆえに、まさにそのゆえに、気分の本質はわれわれに覆蔽され、もしくは遮蔽されたままにとどまっているのである」(同上、113)

根本様式としての「気分」は、根本様式であるがゆえに、つまり、われわれの存在の根底まで戻り導くゆえに、われわれはそれに気づくことができない。われわれの存在の根源にあり、根本様式として支えているものであるがゆえに、それは覆蔽され遮蔽されるのであって、われわれはそれをとらえることができないとハイデッガーは述べるのである。

では、「気分」をとらえることは、全く不可能なことなのであろうか。ハイデッガーは、根本様式としての「気分」は覆蔽され、遮蔽されているからこそ、差し当たり、極端な形で現われる気分を把握することから始めざるをえないと述べる。

「われわれは気分の本質を差し当たりは、われわれに最初打ちよせ襲って来るものから、すなわち気分の極端な振動から、つまり突然裂開して次第に消えて行くものから、把握するのである。われわれが気分というものを、強い振動から考えるために、気分は他の出来事と同列の出来事であるかのように見えるのであり、われわれは、独得の気分づけられてある有を看過し、全現有そのものの根源的なしみ通った気分を看過するのである」(同上、113)

ここで言われる、「極端な振動」、「突然裂開して次第に消えて行くもの」とは、いかなる気分なのであろうか。われわれに時折襲ってくる、強い喜び、悲しみといったものは、自分自身が、今、どのような気分にいるかを把握させ、自身がどのようにあるかを極めてとらえやすくさせるものであろう。しかし、これらの気分を、われわれの存在を常に根本で支えているものとは考えにくい。なぜならば、われわれは常にそのような強い気分で生き続けることはできないからである。強い喜びや悲しみは、その意味で、ある時のみにおこる出来事のようなものであり、一過性のものであるともいえる。ハイデッガーの言う「気分」とは、それとは異なる、「根源的なしみ通った気分」なのであり、われわれの存在を根本で支えるものであり、それこそを把握しなければならぬのであるが、極めて困難なことであるから、出来事のようにおこる気分からとらえ始めなければ

ならないと述べているのである。

ハイデッガーはさらに、「気分」について、全く内的なものではなく、さりとて、外的なものでもないということを強調する。「退屈」という根本気分について思索している部分で、次のように述べる。

「たしかに気分は内なるものであるのだが、同時に気分は外なる物を取り囲み漂い戯れている。しかも、結果として生まれた或る気分をわれわれが内面から物へと拙き出し、移入する、ということはしないのである」(同上、146)

「けっきょく物はただ、既に気分がその物を取り囲み漂い戯れているから退屈であるのにすぎないのかもしれない。物が退屈を惹起するわけではない。しかしそうかといって物が退屈を具備していると単に主観によって認定されてそうになっているだけにすぎないものでもない。要するに、退屈は、一そして結局は、どんな気分もみな一両性具有存在、つまり、なかば客観的、なかば主観的なのである。」(同上、146、下線強調は筆者による)

「気分」が、「なかば客観的、なかば主観的」とはどのような意味なのであろうか。そしてこのことは、われわれの存在の根本にある「気分」をとらえる際にどのような意味をもつことになるのであろうか。

もし「気分」が完全に内的なものであり主観的なものであるならば、今のわれわれが存在している場に誰がいようと、何があろうと、それらに影響されることなく、ある「気分」が生じ、それを生きざるを得ないこととなる。しかし、実際にはそのようなことはなく、たとえある「気分」を生きていたとしても、誰かに出会い、物に触れることにより、新たな「気分」を生きることはありうる。一方で、もし「気分」が完全に外的なものであり客観的なものであるならば、特定の人物や物に出会った時に、いかなる「気分」を生きている状態であったとしても、ある特定の「気分」を生きざるを得ないこととなる。しかし、実際にはそのようなこともなく、たとえ特定の人物や物に出会ったとしても、その時の自身の「気分」により、どのような「気分」を生きるかは変わりうる。つまり、「気分」が「なかば客観的、なかば主観的」であるとは、「気分」を完全に内的にコントロールすることも、完全に外的にコントロールすることも不可能であるということの意味すると筆者は考える。さらに言うならば、われわれ

の「気分」とは、内と外が双方向的に関わりあって出来上がるものであり、それを生きざるを得ないということを意味すると筆者は考えるのである。

われわれは、根本であるがゆえに覆蔵され遮蔽される「気分」とらえることは極めて困難であり、ある出来事と同様の「極端な振動」、「突然の裂開」からとらえざるをえないことを学んだ。さらに、そのようにしてとらえることのできる「気分」とは、「なかば客観的、なかば主観的」なものであり、どちらか一方のみでコントロールすることはできず、内と外が双方向的に関わりあって出来上がるものであるということを学んだ。

ここで改めて、ジュンくんの、「初めての言葉」を考えてみたい。彼が、「うきうき」という、「気分」をあらわす言葉を「初めての言葉」として語ったことの意味を考え、その時に彼により生きられた世界について考察を深めていくこととする。

#### IV 考察：「裂開し現われてきた気分」と「共通した感覚的世界を基盤とした言語の始まり」という視点から「初めての言葉」を考える

##### (1) 裂開し現われてきた気分

コミュニケーションの原理が既にあり、それに基づいた原初的コミュニケーションを既に生きていたとしても、自身が言葉を持ち、それにより他者とのコミュニケーションを生きることが、言葉を出すことのない世界とは全く異なる世界を生きingことを意味する。したがって、その分岐点となるべき「初めての言葉」を出すことは、本人にとって極めて重要な出来事であり、出された「言葉」そのものも極めて重要なものである。ジュンくんにとって「うきうき」という言葉が、それほど重要な「初めての言葉」になぜなり得たのか、改めて考察してみたい。

彼が「うきうき」という初めての言葉を語った2009年4月の関わりの場面に至るまでの13年9か月の間、筆者と彼との関わりの場面の中で、筆者の記憶する限り「うきうき」という言葉が使われたことはなかった。つまり、「うきうき」という言葉は、少なくとも筆者との関わりの場面において、筆者が直接彼に教えた言葉ではなかったのである。しかし、「うきうき」という言葉が彼自身の言葉であることを、筆者を含めて、その場にいた人たちはみ

な、全く疑うことはなかった。その日の彼の感想をあらわす言葉として、極めてふさわしい言葉であると、その場にいた全員がとらえることができた。なぜならば、彼はこの時「うきうき」した気分で見ると、その場にいた人たちは見ることができていたからであり、自身のその時の気分をあらわす言葉を「初めての言葉」として語ったと確信し納得できたからである。

しかし、ハイデッガーの思索に学んだわれわれは、「うきうき」という気分が、彼の存在の根本様式であると考えすることはできない。むしろ、根本様式としてのある「気分」は遮蔽されたままで、「うきうき」という一つの気分が、強い衝動とともに裂開し現われてきたと考えられる。裂開し現われてきた一つの気分は、他の出来事と同様、一つの出来事にすぎない。実際に彼は、この関わりの場面が終わり、その場を離れ、日常の生活に戻る時、「うきうき」とは異なる気分を生きることとなる。その場においてのみ現われてきた「うきうき」という一つの気分をあらわす言葉は、彼の初めての言葉に、なぜなり得たのであろうか。

一つの理由として、裂開し現われたものであるからこそ、対象化することができたということが考えられる。根本様式としての「気分」は遮蔽されているので、対象化してとらえることはできないが、出来事として発生したことは対象化することができる。しかし、このことだけが理由であるならば、他の出来事も言葉として成立したはずである。

「うきうき」という気分を生きていることが、彼にとって極めて重要なことであつたと考えざるをえない。自分が「うきうき」という気分を生きていることを対象化してとらえ、言葉として他者に伝え、他者と共有したいと思えるほどに、重要なことであつた。その日の他の出来事や他の気分と比べ、「うきうき」という気分を生きているということが、彼にとって抜きんでて重要なことであつたのである。裂開して現われた気分は、根本様式としての「気分」を遮蔽するとはいえ、少なくともその時の在り方を規定し支配する。彼は、「うきうき」という気分支配されながら、その日の場面を生きていたからこそ、「初めての言葉」として対象化し表現したと筆者は考える。

このように考えてくると、一つの気分をあらわす

言葉が、「初めての言葉」になり得ることを理解することができるようになる。根本様式であり遮蔽された「気分」から強い衝動とともに裂開し現われた一つの気分は、その人のその時の在り方を規定するほどに重要なものではあるが、一つの出来事であるからこそ、対象化し言葉にすることができる。だからこそ、「初めての言葉」となり得たのである。

では、彼にとっての「うきうき」という気分は、どのように現われたのであろうか。他の気分ではない、他ならぬ「うきうき」という気分は、彼自身が作ったものなのであろうか、あるいは周りがそうさせたものなのであろうか。以下、この点に注目して考察を進めてみたい。

## (2) 内的でもあり外的でもある気分

先述したように、この日の関わり場面にはいつもより多くの人が出て、ジュンくんは、多くの声と拍手と賞賛に囲まれていた。このことにより、「うきうき」と称されるような気分が発生しやすい場となり、それにより生じた気分を自身の気分として生きていたと考えることができる。もしそうだとするならば、ある場により作られていた気分を、彼が受け身的に一方的に受け入れていたということになる。

しかし、関わり場面において、彼は、一方の当事者であり、その場を作る担い手でもあった。いつもとは異なるその日の人の多さ、声の多さ、笑いの多さ、声かけの多さなどを感じながら、彼は様々なことを行った。それを受けて、その場にいる人たちはさらなる反応をし、これらのことが繰り返されてその日の関わりは進んでいった。このように考えてくると、彼は、外から一方的に与えられた気分を生きていたわけではなく、また、もともと生きていた内的な気分をそのままに生きていたわけでもないと考えられるようになる。

「気分」とは「なかば客観的、なかば主観的」であるというハイデッガーの言葉は、このようなことであると考えられる。つまり、関わり場面では、いつもとは異なる場の作る気分をうけ入れ、かつ、その気分を生きながら様々な行動をおこすことにより、双方向的に作られた一つの気分を生きていた。そうして生きられた気分が、「うきうき」だったのである。

では、「うきうき」という気分は、常とは全く異

なるがゆえに、強い衝動を伴い裂開して現われてきたのであろうか。筆者はそのようには考えない。筆者と彼との関わり場面は、彼が「楽しい」（「うきうき」とまで称することはできないとしても）気分であられるように心がけつつ行われ、実際に彼は「楽しい」気分に関わり場面を生きることが概ねできていたと、彼の表情や様子などから筆者は判断することができていた。では、「うきうき」という気分は、なぜ強い衝動を伴い裂開し現われ、彼の「初めての言葉」となったのであろうか。彼と筆者がこの日の関わり場面までに積み重ねてきたものに注目しつつ、さらに考察を進めてみたい。

## (3) 関わり場面での積み重ねてきたもの

この日の関わり場面に至るまで、ジュンくんが少なくとも楽しい気分である場を生きることができるよう、筆者は心がけてきた。なぜならば、彼の気分が崩れると、関わり自体が成立しなくなるからである（注8）。

彼が良い気分に関わり場面を身に着けることができるような場を作ることを、筆者は大事にしていた。関わり場面にいる人たちもそういう場を作るよう心がけていた。具体的には、彼が懸命に頑張る姿を好意的に見守り、彼が何かを成し得た時には拍手し賞賛のを送り、彼の喜びを共に喜んでいた。このようにして行われる関わり場面を、彼自身も好ましいと感じていたと筆者は考えていた。だからこそ彼は懸命に課題に取り組み、そのことがその場にいる人の共感と賞賛を呼び、さらなる場を作ることに繋がっていたのである。

われわれはメルロー＝ポンティの思索から、言語によるコミュニケーションが生まれる時にはその原理となるものが既にあること、コミュニケーションが成功した言葉が積み重ねられていくこと、さらに、共通の基盤であるところの言語体系が作り上げられ、そこでは、能動と受動が、主体と客体が未分化となるほどの侵蝕の中でコミュニケーションが成立するということを学んだ。ここでいうところの、「コミュニケーションの原理」とは、あるいは、共通の「感覚的世界」とはどのようなものであるのかを改めて考えてみたい。

原初的なコミュニケーションが可能となるには、互いに共通の「感覚的世界」を生きていなければな

らない。確かに、互いに感覚的に全く重なることのない世界を生きていると仮定したならば、コミュニケーションが成立することは困難であろう。彼が「うきうき」という「初めての言葉」を語った時、関わり場面を生きている人たちは、共通の「感覚的世界」を生きることができていたと考えることができる。なぜならば、その場にいた全ての人が、「うきうき」という言葉の意味を知ることができ、彼の言葉であることを確信し納得することができていたからである。

このことが可能となった重要な理由の一つとして、互いに共通の「感覚的世界」を、さらには共通の言語体系をもっていたことが挙げられる。しかし、筆者はここで、「うきうき」が「初めての言葉」として語られたことの意味について改めて考えてみたい。彼自身を含め、彼との関わり場面を生きてきた人たちは、「うきうき」と称されるような、楽しい気分を生じさせる場を作るよう努め、実際にそのことを達成し積み重ねてきた。その場こそが互いの基盤となる共通の「感覚的世界」を作ってきたのである。さらに言うならば、この場は同じ一つの「大地」ともいうべき場から成り立ち、この場からあらゆる経験が可能となり、根本的な「気分」が生きられ、そこから「うきうき」という気分が、強い衝動とともに裂開して現われ、それが言葉として対象化されたのである。

以上のように考えてくると、彼が、「初めての言葉」として「うきうき」と語ったことが必然であると考えられるようになる。「うきうき」という言葉は、彼だからこそ語ることができた言葉であり、また、彼と筆者との関わり場面を積み重ねてきたからこそ語ることができた言葉である。まさに、共通の基盤をもっていたからこそ、語られた言葉なのである。関わり場面の中で、関わり手だけではなく、その場にいた人たち全てが大事にし積み重ねてきたものが共通の基盤となり、そこから「初めての言葉」が生まれ語られたと考えるべきであろう。

一つの気分が生きられた時、その気分は外から押しつけられたものではなく、自分だけで作ったものでもない。外的なものとの内的なものが双方向的に働きかけあって、根本様式としての「気分」から強い衝動をもって裂開し現われてきた気分が「初めての言葉」となった。その日の場面だけでなく、関わり

の歴史の中でともに大事にしてきたものが、その後の彼の世界を変えるであろう「初めての言葉」になり得たと認識すべきであると筆者は考える。

以上、ジュンくんとの関わり場面の中で、彼が語った「初めての言葉」について考察を重ねてきた。彼の「初めての言葉」について、このように考察することにより、彼との関わり場面が大事にしてきたことを改めて振り返ることができるようになる。関わり場面の中で何を大事にするべきか、何を積み重ねるべきかを明確にするために学ぶことは、関わり手であろうとする人間にとって極めて重要なことである。それらをもとにして共通の基盤が作られ、そこから言葉が語られるからである。彼だからこそ語ることができた「うきうき」という言葉の意味を深く考えていくことにより、関わり場面の中で大事にすべきことに気づき、暗黙のうちに当たり前のようにしていることの重要性を改めて考えることができるようになる。筆者は考える。

さらに、本論文において彼との関わり場面で大変にしていたことを、「初めての言葉」を通して改めて考えたことにより、他の事例においても大事にしつつ積み重ねてきたことに気づき、共通の基盤となっているものに改めて目を向け深く考えることができるようになる。関わり相手の相手となる障害の重い方たちが、筆者と出会う前に大事にしてきたことは各々異なるものであるかもしれない、これから大事にしていくであろうことも各々異なるものになるとも考えられる。しかし、各々の事例において、普遍的に成立する一つの視点をもつことは、障害の重い人たちのよき関わり手であろうとするわれわれにとって極めて重要なことであり、一つの事例に深く学ぶことは、今後も課題となり続けることであると筆者は考えるのである。

## 注

1 ジュンくんは、「うきうき」という「初めての言葉」をペンで書くことにより表現した。彼はこの後も、現在に至るまで、数多くの言葉をペンで書くことにより表現し続けている。本論文では、声を出して「語る」ことはしていないが、彼が言葉を書くことを彼の「語り」ととらえ、書かれた言葉を彼が「語った」言葉とみなすこととする。



2 筆者と出会った時のジュンくんの様子の記述、彼の学習の過程、ならびに、彼が、「うきうき」という「初めての言葉」を語った時の様子の記述は、下記の拙論に詳述した。この部分の記述は、下記の拙論と一部重複する。

遠藤司2011「1つのものとの関係から言葉の発生に至るまでの過程—ある一人の重障児との関わりから学んだこと—」『駒澤大学教育学研究論集第27号』pp.23-61所収

3 「メルロー＝ポンティ」の日本語表記については、「メルロー＝ポンティ」とあらわしたり、「メルロ＝ポンティ」とあらわしたりするなど、必ずしも統一されていない。本論文では、『知覚の現象学』の日本語訳にしたがい、「メルロー＝ポンティ」という表記に統一することとする。

4 「ハイデッガー」の日本語表記については、「ハイデッガー」とあらわしたり、「ハイデガー」とあらわしたりするなど、必ずしも統一されていない。本論文では、『形而上学の根本諸概念』の日本語訳にしたがい、「ハイデッガー」という表記に統一することとする。

5 メルロー＝ポンティの言語論について、筆者は下記の拙論において詳述した。この部分の記述は下記の拙論と一部重複する。

遠藤司2015「言葉を「語る」ことに関する一考察—一人の重度・重複障害者との関わりから学ぶ—」『学ぶと教えるの現象学研究十六』pp.1-14所収

6 この「積み重ね」を、メルロー＝ポンティは、著書『知覚の現象学』の中で、「沈殿」と称した。

「あらゆる表現操作のうちひとり言葉だけが、沈殿作用をおこして一つの相互主観的な獲得物を構成することができる」（メルロー＝ポンティ、1967、311）。

7 フッサール、E. 1980「自然の空間性の現象学的起源に関する基礎研究—コペルニクス説の転覆」（新田義弘、村田純一訳）木田元、滝浦静雄、立松弘孝、新田義弘編『講座・現象学3 現象学と現代思想』弘文堂 pp.267-294所収

8 ジュンくんとの顔合わせ後の初回の関わりの中で、筆者の関わりを進め方の拙さから、彼は気分を崩し泣いてしまい、しばらくの時間、関わり場面自体が成立しなかったことがあった。この

時、筆者は、彼が場の変化を鋭敏に感じることができ、それがよくない状態に置かれると彼の気分も崩れ、関わり自体が成立しなくなることを学んだ。以来筆者は、彼が楽しい気分であらうことを何よりも大事にしながら関わり場面を進めてきた。

#### 引用文献

ハイデッガー、M. 1998『ハイデッガー全集第29/30巻 形而上学の根本諸概念』（川原栄峰、セヴェリン・ミュラー訳）創文社

メルロー＝ポンティ、M. 1967『知覚の現象学1』（竹内芳郎、小木貞孝訳）みすず書房

メルロ＝ポンティ、M. 1979a『世界の散文』（滝浦静雄、木田元訳）みすず書房

メルロ＝ポンティ、M. 1979b『言語と自然』（滝浦静雄、木田元訳）みすず書房